ひとはく研究員だより

まちづくり イメージ共有へ「やってみる」

福本優研究員

まちづくりについて、皆さんはどんなイメージを持っていますか。きっとイメージは十人十色。人の数だけ考えがあることが普通です。そしてそれは悪いことではありません。まちづくりの現場では、この十人十色の状態から一つの方向、つまりまちづくりのコンセプトを持って、一緒に取り組むことを目指す場合が多いのです。

しかし、普段から一緒に生活しているわけではなく、一緒に仕事しているわけではない現代の地域の住民みんなが寄り集まっても、まちの将来イメージを共有することさえも実は大変だということに気づきます。私たちがみんなでコンセプトをつくるためには、共有するイメージの準備が足りていないのです。

そこで地域のみんながまちの将来イメージを共有するために、「やってみる」から始めてみることをお勧めしたいと思います。写真はフラワータウンフェスティバルで駅前の道路を通行止めにし、広場化した時の様子です。この事業は三田市や北摂コミュニティ開発センターなど、地域のステークホルダー（利害関係者）が協働して取り組むニュータウン再生事業の一つです。

モータリゼーションまっただ中に開発されたまちですが、近年のニーズの変化に合わせ、より人に優しい公共空間づくりが求められています。とはいえ、何から取り組むのが良いかは難しく、コンセプトや計画を先行させたくとも、なぜそれが必要かを説明する材料がありません。

フラワータウンフェスティバルで広場となった駅前の道路

そこでやってみたのが、フェスティバル時の道路の広場化です。たくさん考えられる将来の姿の一つを具現化すると、そのイメージを基本に「ちょっとやりすぎじゃない」や「今回のにぎわいは良かったね」といった共通言語を持つことができます。

これが地域再生のコンセプトづくりの重要な準備になります。共通言語を持って、コンセプトづくりに取り組めると、課題意識だけに支配されず前向きな議論も浮かびやすくなるものです。それに、そこに参加していなかった人にも写真や映像を通じて、そのイメージを共有することができるのです。

取り組みの規模は違っても、誰かと一緒に何かを始める時には、この「やってみる」から始めるアプローチは有用であることが多いと思います。生活の背景が異なる地域の人たちが集まっていることを理解し、小さくとも素敵なまちの将来のイメージを共有できる取り組みを始動させることが、実は地域のまちづくりコンセプトを決める近道になるかもしれません。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。